



RIKKYO SECOND STAGE

Contents

- P1 自由に、爽快に生ききる
 P2~3 清里清泉寮合同ゼミ合宿
 P4 本科ゼミナール紹介 P5 専攻科の紹介
 P6 講演会の紹介 P7 RSSC同窓会・サポートセンター
 P8 世界大会で銀メダル受賞、イルミネーション点灯式、etc.

立教セカンドステージ大学(RSSC)は、立教大学が提供する生涯学習の場です。RSSCは、RIKKYO SECOND STAGE COLLEGEの略称です。



発行：立教大学 「立教セカンドステージ大学」

編集責任：千石英世 編集長：新井純孝

発行日：2014年2月25日

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1



「自由に、爽快に生ききる」

立教大学名誉教授
横山 紘一



先日、朝早く入間川の上に架かった橋を渡っているとき、遠くに幾重にも連なった美しい山々が見えました。前日の台風が過ぎ去り空気が澄んでいたのでした。

その時、私は「そうだ、心が澄んで清らかであれば、自分が捉える世界は清らかになるのだ」と気づきました。

私もそうですが、世間の荒波の中でさまざまな経験を積んでこられた立教セカンドステージ大学(RSSC)の皆さんの心の底には、その経験が積み重なって、それが表層心に吹きだし、あれこれと考え悩む毎日であったと思います。

そこで、皆さんは、それまでの職場を辞める、あるいは子育てから解放される、等々をきっかけに、「よし、これでは駄目だ、学び直したい」と思い立って入学されたのではないのでしょうか。「学び直し」—RSSCの標語の一つですが、「捨てて学び直す」と言い換えることも大切です。一度得たものを捨てることは難しい。でも、深層心の中の重い堆積物を思い切って捨てよう決心してみましょう。そして捨てつづけてみると、心の中から塵やほこりが徐々に取り除かれ、心は澄んだ空気のようになって、自由に爽快に生きていくことができるようになります。

深層心の中の一番重い堆積物から湧き出てくるのは、「自分は、自分の」という思いと言葉です。この執拗な

自我執着心が薄まるにつれて、たとえば、ボランティア活動で誰しもが「他人の為に尽くすのは実は自分の為ではないのか」という悩みが薄まって行きます。このような悩みが薄まるのは、「自分」と「他人」とを分別する心が希薄になるからです。

地獄とは、極楽とは何か、その解釈は宗教の教えからすればさまざまに違ってきますが、現実には「自他対立」の世界が地獄であり、「自他一如」の世界が極楽です。

再度言いますが、「世間の荒波の中で」浮き沈みしながら生きてこられたRSSCの皆さんは、少し強い言い方かもしれませんが、地獄で生きてこられたのではないのでしょうか。どうか人生の道で一息つかれた訳ですから、しばらく心を静寂にして、自分しか背負うことができない自らの心の中を観察する時間を持ってください。そして、カントの道徳律ではないですが、無条件・無理由に心の底から湧き出てくる声に、命令に耳を傾けてください。

それは新たに自覚することです。自覚とは自分に目覚めることです。その目覚めによって、先に述べた自我執着心が薄まった生き方が、あの宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の中の「アラユルコトヲ ジブンヲカンジョウニ入レズニ ヨクミキキシワカリ ソシテワスレズ」他者のために東西南北に奔走する生き方が可能になります。

どうか賢治に負けることなく、これからの人生を生きることのない情熱を持って、自由に、爽快に生きて、生きて、生ききってください。

(立教セカンドステージ大学運営委員)



清里清泉寮

9月6日(金)～8日(日)の日程で合同ゼミ合宿が清里の「清泉寮」にて行われ、本科生67名、教員5名が参加しました。清里の大自然とふれあい、参加者の相互交流と今後のセカンドステージ大学生活の充実につながる有意義な合宿でした。

清里合同ゼミ合宿のコンセプト

清里合同ゼミ合宿のコンセプトは、「仲間作り。そして、一人ひとりが主役。」でした。これは、8人の各ゼミ長から成るゼミ合宿実行委員会で決めました。

自他共に認めるRSSCの特長の一つに、「幅広い多様性を持つ中高年齢者の学び直しの間」というものがあります。受講生は、50歳代から70歳代という幅広さから、生まれ育った時代環境や背景も大きく異なり、これまでの人生経験や考え方も多種多様です。また、RSSCでの在籍期間は1年から2年と短く、そこで修得できる学術的知識には自ずと限りがあります。

そこで、受講生の多くがRSSC時代に期待することの一つに、「仲間との出会いと交流により分かち合う刺激と気付き」があるものと思います。

この仲間との出会いと交流を、より主体的なテーマとして捉え、前向きに取り組んでいきたい。それは我々一人ひとりが、これからのセカンドステージを楽しく元気に生き抜いていくためにも必要なスタンスなのではないだろうか？だからこそ、「清里合同ゼミ合宿を、その仲間作りのキッカケの場としたい」そんな想いをゼミ合宿コンセプトに込めました。(H)



みんなの頼れるリーダー達！
～2013年ゼミ合宿実行委員会・女性サポートチーム～



さあみんなで輪になって踊りましょう☆
(フォークダンス指導…江田さん)

ある日森の中～♪
熊さんに会った
花咲く森の道
熊さんに会った～♪
(歌唱指導…松崎さん)



ビデオ鑑賞

「ポール・ラッシュ博士の生涯」のビデオを鑑賞し、生涯を日本のために捧げた博士の行動に感銘を受けました。

講演会

講師は千石英世先生で「トルストイについて」文豪の評価が揺ぎ無いものとなった晩年のトルストイの私生活を背景として説明され、2人の評論家(小林秀雄、正宗白鳥)による違った角度からの解釈と表現文体に関して理解を深めることが出来ました。

懇親会

初日は、懐かし青春時代の歌の合唱やフルート・物まねの鑑賞など多彩なプログラムを楽しみました。

その後、ミーティングルームに参加者が一同に集まり、夜遅くまで語りあかしました。幹事さん手作りの名札も大いに活躍し、合宿中に新しい仲間の名前を覚えました。

自然保護観察

2日目の早朝は、レンジャー(自然案内人)とブナの木が生い茂る森へ入り、山草を使った草笛などの遊びを学びました。また、木々の間に寝転び、静かに肌で風を感じるなど、自然の素晴らしさを体験できました。レンジャーの自然に対する愛情や素直な人柄に触れられて嬉しいひと時でした。



聖アンデレ教会見学

コミュニティづくりのシンボルとして最初に建てられた教会です。地域の人に親しみやすいよう配慮された畳敷きの礼拝堂で、武藤チャプレンからポール・ラッシュ博士の業績を学ぶことができました。

オプションイベント

清里の自然や科学技術にふれました。

①「野辺山・清里周辺バスツアー」

野辺山天文台、農村文化交流館での宇宙映像鑑賞、萌え木の村などを見学しました。



合 同 ゼ ミ 合 宿



② 「清里周辺スローウォーキング」

ゆっくり楽しく、高原の爽やかな風・空気とパノラマビューを体験しました。

フォークダンス

ホールでフォークダンスを踊りました。先生も輪に入り、狭い

会場は高校時代の熱気が戻って来ました。気になるあの人も踊れました。全員参加のジャンケンゲームでは、童心に返り楽しい時間が共有出来ました。



ポール・ラッシュ記念センター見学

地域の人達をはじめ多くの人から今も尊敬されているポール・ラッシュ博士の生涯と業績を歴史的資料と数々の遺品展示を通じて学び、博士の生きた証しに触れました。☆「清泉寮」は、ポール・ラッシュ博士が創設したキープ協会が運営する宿泊研修施設です。

清里から未来へ

副学長 千石英世

先日、ある集まりでセカンドステージ大学の話をして参りました。集まりの趣旨は高齢化社会日本をどう生きぬくかといったテーマで数人の語り手がスピーチする大規模行事とのこと。その一コマとして20分ばかりスピーチをするよう依頼されていたわけです。もう一度学びなおすことが、生き甲斐につながると言いました。RSSCの基本ですね。そのあと、時間が少しありましたので、私はチェーホフの話をしました。4大戯曲の第一作「かもめ」の話です。ソーリンという人物の話です。青春の苦闘のなかにいる主人公の青年に同情と励ましを与える好人物です。定年退職した元高級官僚、62歳。だが、人生に食い足りない思いをもって、悶々としている。それが我々の姿に二重写しになるという話です。どうでしょうか。一読してみてください。清里ではたしかトルストイの話をしましたね。今日はチェーホフでした。



五期生の集いin清里について～五期生会～

五期生会は本科時の清里合宿以来、一年ぶりに清里清泉寮への旅（9月5～6日）を学生37名（本科のみ修生も参加）と坪野谷先生の38名で行いました。

1日目（9月5日）は、出発時の雷雨・豪雨を心配したものの、中央高速談合坂SAでは青空がのぞき、日ごろの「五期生の行いの良さ」が実証されました。「道の駅こぶちざわ」でそば打ち体験と昼食、15時に清泉寮到着後にゲストスピーカーとしてお招きした笠原先生から「欲望と近代社会の位相」の講演をいただき、お蕎麦も学問もいただくという贅沢な一日でした。夕食後は星空観察会、花火大会で童心に浸り、その後の懇親会はRSSC生活を振り

返りながらの和やかに真剣な話で盛り上がり、話が尽きないままに24時を過ぎてしまいました。2日目（9月6日）、キープ協会理事の黒田さんに見送られて出発。9時30分に「サントリー白州工場」見学、13時「清春芸術村」で芸術鑑賞を行ってから帰路へ。今回の旅は幹事団4人のアイデアと尽力により、豪雨を吹き飛ばしての想いで深いものとなり、何より五期生の友情を再確認できた旅となりました。五期生会は他にも「集い」を催し、情報交換・友情の輪を楽しんでいます。(N)



RSSCクリスマス・パーティに寄せて “大いなる交流を！そして感謝を”の場に

思い返せば4月3日、春の嵐という記憶に残る天候の中、「生き方探し」や「学び直し」をはじめ、其々の思いを持って若者のようにわくわくした期待感と多少の不安感を抱えRSSCに入学しました。それから早や9カ月が過ぎようとする時期にクリスマス・パーティを開催しました。



今多くの方々は当初の不安を吹き飛ばすようにゼミの仲間や他の本科生とのかけがいのない時間を満喫されていると思います。少し残念なことは今年度の専攻科生と本科生が別々のゼミに分かれたため双方の交流が限定的

になってしまったことです。

そこで今年のクリスマス・パーティの一つ目のコンセプトは“大いなる交流の場”にしたいと考えました。本科生同士の交流はもとより、専攻科生とも多くの交流を図れるよう歓談の時間を許す限り設けました。

二つ目は“感謝の場”です。私たちがRSSCで学ぶことができるのは多くの方々、とりわけ「家族の理解や支え」があって初めて可能となる訳です。ともすれば私達はこの事を忘れがちになります。多くの方の支えで今の自分が在ることを改めて感謝する場としていただけたらとの思いで開催しました。

お蔭様で多くの方々のご参加を頂き、二つのコンセプトに相応しい楽しくかつ記憶に残るパーティとすることが出来ました。委員一同、感謝申し上げます。(T)

本科の紹介

「特色ある独自のゼミ活動」

千石ゼミ

後期ゼミは教室を飛び出して、美術館や博物館に足を運びました。現代アートの不思議な世界に戸惑っていると、千石先生が「楽しんでますか？」と声をかけてくださったのが印象的です。千石先生による『白鯨』講義も3回あり、文学と芸術を堪能しました。修了論文の途中発表では先生ならではの適切なアドバイスをいただき、ゼミ生一同楽しんで完成できました。



鳥飼ゼミ

我らのゼミを一言でいうなら、それは洗練されたおとなのつき合い。前期は漱石の小説にも登場する秘湯を巡るゼミ旅行。怖いロープウェイもなんのその。後期は更に骨太、ゼミ発表。全てが手作り、地域デビューもお手伝い。意見の相違はゼミの豊かさを育む贈り物。そんな信頼と受容に溢れたチーム鳥飼、その魅力をあなたにも伝えたい。鳥飼ゼミへようこそ。



古賀ゼミ

古賀ゼミ生は各自個性豊かで多士濟々ながら、基本的には真面目。「現代社会を生きる」との大テーマに対して真摯に対峙した結果、前期は「日本の貧困」をテーマとして選定、現代日本の喫緊の課題の一面を切り取る発表を、後期は「2020年東京オリンピック」をテーマに切り替えて、日本が今後7年間に何をなすべきか、各自独自の調査をふまえて活発な意見交換をしました。校外活動として、毎週ゼミ活動終了後は参加自由のゆるゆる飲み会、時には池袋演芸場での落語鑑賞会等でゼミ生間の積極的なコミュニケーションを図りました。

高橋ゼミ

高橋ゼミでは自由闊達に意見交換し、知識を広げ深めることをモットーにしています。

「“どんと来い” 超高齢社会を生きる」というテーマで前期の発表を行いました。65歳以上の人口の占める割合が4人に1人になる状況に鑑み、私達がやるべきこと、出来ることを議論し、検討する事は喫緊な課題であると考えたからです。社会への恩返しを行う、サーバント・リーダーを目指す、相互扶助の精神を持つというコンセプトに纏りました。このコンセプトに基づき、どのような夢と生き甲斐を持ってこれから社会に貢献することが出来るかを発表しました。

上田ゼミ

11月のある日、上田ゼミでは地元ゼミ生の案内で浅草探訪を兼ねた校外研修を行いました。老舗のロシア料理店で名物のキャベツロールに舌鼓を打った後、浅草寺、待乳山聖天、隅田川界隈を散策、吾妻橋アサヒビール本社まで



足を延ばす。同社展望喫茶では思いがけなく昼気楼を目にし、一同感激。浅草を一望しつつ、ゼミ発表報告や修了論文について語り合い、互いの絆を深めることができた実りある一日となりました。

菊野ゼミ

前期は、互いの気心を知るまでに、ひと月前後も掛かりましたが、その後は「高齢化社会とコミュニティ」をテーマに、比較的スムーズに活動できました。

後期は議論だけではなく、ゼミ仲間が設立した学童保育のNPO法人「春野のびる学童クラブ」で学童と触れ合い、藤沢市のボランティアセンター「ささえ」では、実際に活動をしている皆さんに話を聞かせていただきました。

夏休みは、横浜美術館で「プーシキン美術展」を見学。中華街に繰り出した後、夜の山下公園を散策。11月には好天の下、高尾山で紅葉狩を楽しみました。

鈴木ゼミ

鈴木ゼミ5、6期生有志は、7月20日に東京電力福島第二原子力発電所を見学しました。簡易防護服、線量測定器を装着しての3号機原子炉建屋等のサイト見学は緊張を伴うものでした。震災から2年4カ月を経て現地はかなり整理・整備が進んでいましたが、被害の傷跡はサイトに残っています。今回の見学を通じて、現地の方々が真摯に復旧に取り組んでいることを確認しましたが、起きた事故の大きさはとても言葉で言い尽くせるものではないと改めて実感しました。



横山ゼミ

横山ゼミのサブゼミでは、「我々元気なアクティブシニアは何ができるか」に焦点を当てて議論をしました。キーワードはアクティブシニアの社会貢献と生きがい、健康長寿などです。探せばどこかに書いてありそうな内容でも、自分たちの経験をもとに実直に語り合った時間はRSSCでなくては得られないものだと思います。前期最後の発表では時間の関係で、予定していたものを伝え切れなくて残念でしたが、後期は「我々自身が今後どんな新しいライフスタイルを創造していくのか」というテーマで熱く語り合いました。

専攻科の紹介

学習活動

今年度から導入された課題解決型学習(PBL)の活動について紹介します。

【笠原グループ】

PBLとは、グループの掲げた一つの研究テーマに対して、メンバー各自が自主性・自発性・協調性を発揮しながら、とても個人では成しえない、より高いレベルの共同論文を完成することです。



我々ゼミでは、日本社会が抱える課題を、ビジネス手法を用いて解決すべくソーシャルビジネスに取り組みました。それらは今解決しないと次世代にそのツケが回りかねないものです。とは言え、ソーシャルビジネスとは何かの共通認識、取り上げる社会問題のテーマ絞込みには数か月を要し、途中何回もPBLの難しさを痛感しました。テーマを掘り下げる程、生きた情報が求められ、社会起業家・創業支援団体・NPO・地域コミュニティ再生に取り組む大学・限界団地においてコミュニティ再生に立ち上がる女性ボランティア等と意見を交換、そのフィールドサーベイにかなりの時間とエネルギーを費やしました。キャンパスを離れての自主活動は思いのほか楽しく、様々な人々との出会いは、本科生時代には体験できないものでした。仲間の知的レベルの高さを知り、集団的知の創造を感じ取りました。これこそPBLの真髄でしょう。論文完成の喜びに加え、活動を通じより深まった仲間との絆こそは、無限の財産とも言えます。(N)

【庄司グループ】

今年度から導入されたPBLは当初専攻科生の間でも戸惑いがありましたが、各グループともテーマが決まってからはスムーズに進んでいったように感じます。



私たちは“地域コミュニティと居場所”というテーマの中で、“お寺と地域の関わり”について研究しました。現代社会の中でお寺は葬儀や法事、墓参り等の時以外には足を踏み入れられないような閉鎖的なイメージがあります。しかし、若い僧侶たちを中心にお寺カフェや音楽イベント、路上生活者への炊き出し等様々な取り組みを行っているお寺も増えてきています。こういったお寺にフィールドワークに行き、お話を伺う事ができたのは私達にとって大変貴重な体験でした。

PBLの良さはみんなで色々な意見を出し合いながら進めていく点です。お互い知恵を出し合う事によって1+1は2ではなく、3にも4にも10にもなるのだと思います。協力により進められたPBLでは、最終的にできた結果よりその過程の中でどんな効果が得られたかが重要ではないでしょうか。仲間と時間を共有して作り上げたPBLは一人で行う研究とはまた違う大きな達成感が得られました。(I)

専攻科生の声

RSSCの一年目、本科では所属したゼミをホームとして、それぞれがカリキュラムの中から興味のある講義を学び、またゼミでは修了論文に向けて、課題について討議や提案などお互いに意見を交換して、コミュニケーションを深めました。ディベートも初めての経験で、RSSCゼミ対学部生ゼミの侃々諤々のやりとりで自分の勉強不足の痛感もしました。そして60歳を過ぎて新しい友人たちと出会えたのは何にも代えがたいことです。



木下グループ
北川範子さん

二年目の専攻科では今年から全員が一つのクラスという形でその中を四つにグループ分けされています。一年目同様全カリの講義で知への好奇心を満たし、研究会や同好会への参加でさらに多くの受講生の方々と親交ができたことに感謝しています。

修了した先にある私のセカンドステージについてはまだ模索中ですが、これまでとは全く異なった働き方をしてみたいですし、RSSCで得た知識を社会参加のヒントにするつもりです。

まず第一に、受講生同士の仲間意識が一層強まり、また大学の先生方との親交も更に深められたことであり、専攻科修了(卒業)後も、引き続きお付き合いしていける「生涯の友」を得ることができたことだと感じております。そして、今までの人生を振り返っても、おそらくそんなに経験したことのない、多くの良き友達・仲間恵まれて、日々楽しく充実した毎日をおくることができていることだと思っています。



坪野谷グループ
若井泰樹さん

本科生時代は、どうしても学校や授業、ゼミ(論文)、そして受講生仲間慣れることで精一杯の感がありましたが、専攻科進学後は、精神的にもゆとりができ、ゼミのフィールドワークやサポートセンターの活動にも幅や厚みができ、真から自分の納得・満足のいく行動ができるようになり、そこから得るものもさらに大きくなったように感じています。そして、同窓会の各サークルやサポートセンターでの様々な研究会活動に深くかかわり、自ら積極的に行動していくなかで、修了(卒業)後も、各々のテーマを共有した仲間たちと継続してサークル活動や懇親会などを継続して行っていける「基盤づくり」ができたこと強く感じています。

講演会の紹介

公開講演会 「ニュースの現場から」

10月5日(土)、NHKニュースキャスター大越健介氏の講演がありました。会場の7102教室には300人余りの大勢のRSSC受講生、修了生、学部学生、教職員、一般の方が来場しました。

簡単にご自身のバックグラウンドを語った後、すぐに本題に入り、ニュースキャスターの仕事の内容を具体的に説明してくれました。取材から始まり、カメラマン、ディレクターなどが加工をして映像と音声にまとめるそうですが、自身が記者をしてきた経験で、ニュースの核心を見つけることを最優先してきたとのこと。集められた情報を伝えるだけでなく、一步踏み込んで伝えることで7時のニュースとは違うものにしたかったそうです。

クライマックスは3.11東日本大震災を報道したときの話でした。シナリオのないなかで報道することの難しさを語ったあと、スクリーンで震災の歌である「花は咲く」

が流されました。聴衆は皆、改めて二年半前の悲劇に心を痛めると同時にあの歌を震災で亡くなった人々からのメッセージとして聴くことにより、その心は生きていることを実感しました。最後に、ジブリの宮崎駿氏、元サッカー日本代表の岡田武史氏とのインタビューで心に刻まれた「時代と格闘して生きることの覚悟、先を見据えてより良い社会を残していくことの志」が今は大越氏の指針になっていることを語って講演は終了しました。

キャスターとして、情報を目に見えない聴衆に送り届けることで培われた発信力、話の流暢さはさすがで、長時間、我々聴衆を魅了し続けました。しかし、メディアの社会的役割、或は放送局の限界などテレビで言明できない課題に踏み込むことを期待した声もありました。



立教セカンドステージ大学 創立5周年記念公開シンポジウム

「新たな生涯学習とアクティブシニアの役割～学び直し・再チャレンジ・異世代共学～」と題してシンポジウム(基調講演とパネルディスカッションの2部構成)が11月7日、池袋キャンパスに於いて、RSSC受講生、修了生、学部学生、教職員、校友、一般と多数の方々の参加を頂き開催された。

基調講演では坂東久美子氏(文部科学省審議官)が「超高齢社会における生涯学習政策の方向性とRSSCへの期待」と題して「今後到来する人生100年の長寿社会では体力、知力、意欲の高いシニアが増えていく。シニア層は教養、生きがい探究、健康、社会参画、人との交流等のニーズがますます強くなる。その中でシニアの自立、協働、創造が可能となる生涯学習社会の実現を目指す必要がある。大学がそのハード、ソフト、ヒューマン資源を活用しその役割を担うことの期待が大きい。」と見解表明された。



坂東久美子氏

松田智生氏(三菱総研プラチナ社会研究センター主席研究員)からは「プラチナ社会研究実現にむけた大学の新たな役割」と題して「日本は高齢化、環境問題については課題先進国から課題解決先進国を目指すべき。高齢社会といってもシニアだけの社会ではない。学んだ成果を活かして地域社会に貢献できる分野は多い。小学校でのゲストティーチャー、地域史の編纂、町おこし、営業経験、地域社会へのシニアデビュー支援等。錆の出るシ

ルバーでなく輝き続けるプラチナ社会を目指すべき。人生は2期作と捉え、65歳以上は義務教育としても良いのではないか。」との将来に向けての提言がなされた。



松田智生氏

パネルディスカッションではRSSC受講生、修了生からテーマ「RSSCの社会との関わりと社会貢献活動の実践」を巡る活動状況として、金子多美江氏(4期生)から「電気、学校が無く、働く機会も乏しいフィリピンの少数山岳民族に対する教育・自立支援活動」が紹介され、次に杉山芳夫氏(5期生)から「現在RSSCメンバー5名で東北地方の小さな市の町おこしに取組中。自治体、大学、銀行、地元企業のコラボ。地域の特性を活かし、魅力のある、自分で住みたい街を目指すという活動」が、最後に坂田博久氏(5期生)から「RSSCとしまコラボクラブは豊島NPO推進協議会と共同して豊島区内の地域課題を発見し、企画運営と実践を通じ経験を積み上げ自身の地域活動に繋げる。」とそれぞれ現状、問題、今後の方向等につき報告がなされた。

最後に、報告のまとめとパネルディスカッション形式の活発な議論がなされシンポジウムは終了しました。



フィールドワーク

☆橋本先生「社会福祉法人至誠ホーム見学記」

夏季集中講義「高齢者の生活と介護保険」で私達は9月20日、至誠学舎立川・至誠ホーム長である橋本正明先生の案内で施設内を見学、一部介護を体験。

至誠学舎立川は明治45年「誠の心」を理念とする司法少年保護団体として設立された。施設職員の方々は、皆さん明るい笑顔で利用者の方と対応されていた。ピアノを弾いていたある女性が「先生！」と笑顔で橋本先生に駆け寄って来られた。

施設内は明るく清潔で、利用者個々に合った介護や生活支援がゆったりとした時間の中で行われていた。ボランティア活動も活発、年間15000人のボランティアが至誠ホームを支えている。初めてボランティア活動に入り、施設の良さを知り、後に利用者になった方もいる。

利用者の「終の棲家」として、没後の安心の為、納骨堂を用意しており、私達も利用者とともに説明会に同席した。高齢者一人ひとりの生活を援助して支える、総合的なサービスの提供に日々努力されていることを強く感じた。(S)

☆稲本先生「高山オークヴィレッジ訪問」

「森から探る次世代ビジネス」の受講生23人で晩秋の高山に行ってきました。稲本先生の授業は日本が世界でも豊かな森林を有する森の国であるという話から始まる。ところが日本は1970年代から木材輸入を増やし続け豊かな国内の森林資源を生かしていない。企業のコスト計算によればそうなるのだが、どこかおかしいのではないかという思いが稲本先生の原点であることが改めてわかりました。

オークヴィレッジでは木の個性を生かした家具を見てから、森の木から採取した枝葉から精油を抽出する工程を見学し、アロマの香りで癒されました。近年、世界的に注目をあびているアロマについての説明はかなり熱が入ったものでした。次に高山や白川郷の古民家を見て、風土に適合した木材の素晴らしさ、知恵と技術に感動しました。高度成長期の日本はひたすら経済合理性だけを追求し、先人の知恵や地域の特性を無視した画一的な開発を続けてきたが、成長期の終わった現代はそんなことを反省する時なのかもしれない。(K)

RSSC 同窓会・サポートセンター

「RSSC同窓会活動の報告」

現在RSSC同窓会には1期生(2008年度)から6期生(2013年度)まで500名を超える方が入会しています。同窓会はRSSC在籍中及び修了した後も交流の場として、会員は各行事や活動に自由に参加しています。

同窓会行事としては毎年5月に総会が開催され1年間の活動方針が決められ、それに基づいて同窓会が運営されています。総会に引き続き記念講演会と懇親会も開かれ会員の交流の場となっています。また毎年RSSCと共催による講演会が開催され、今年はNHKニュース9キャスターの大越健介氏を迎えて講演会「ニュースの現場から」と懇親会が10月5日に開催され、多くの会員が参加しました。同窓会には現在4つの研究会と5つの同好会があり各期生が参加しています。各研究会・同好会では定期的にそれぞれの課題による講演会・研修旅行・見学会等が計画され会員以外も参加して活動が活発に行われています。今後新しい研究会・同好会が出来て交流の輪が広がることが期待されています。これら同窓会行事や研究会・同好会活動予定及び報告の広報として、同窓会ホームページ(<http://www.rssc-dsk.jp>)があり、新鮮な情報、ホットな話題を提供するために常時内容が更新されて、会員の利便に役立っております。更に同窓会メールマガジンも年数回会員全員に発信され、行事や各活動が知らされます。同窓会全体の運営は総会で選ばれた役員が毎月集まって協議し決めております。(O)



「としまコラボクラブ活動報告」

4月16日、豊島区の民設民営のNPO中間支援団体「としまNPO推進協議会(とN協)」とコラボ活動をする「としまコラボクラブ」が5期生を中心に19名で発足。クラブメンバーは「とN協」が実施している各種事業に企画段階から参画、実践活動を行うことで、それぞれが自信を付け地域に帰り、地域課題解決のコーディネーターになることを目指すこととしました。

池袋第二公園・西口公園での「えんがわ市」で地域の賑わい創出を学び、7月と11月には「としまコラボクラブ」としてフリーマーケットを出店。売上金を東北支援団体の二か所に寄付いたしました。



豊島区内の小学校で地域の高齢者と一緒に給食を食べるミニ講座付きの「おたっしや給食」、「みらい館大明」で実施される生涯学習講座の運営スタッフとして参加してきました。

各自が参加した事業内容・感想はクラブ員全員にメール配信し、体験の共有化を図ってきました。

後期からは実践活動面だけではなく企画面でも参画。「おたっしや給食」のミニ講座では2名のメンバーがそれぞれ「ものまね」、「カラーコーディネート」を企画担当しました。

又みらい館大明の企画講座「お父さん変身講座」を11月16日から3回シリーズで企画、クラブ員挙げて一般参加者と共に楽しみました。現在は6期生も含め29名のアクティブシニアが楽しんで活動しています。(S)

世界大会で銀メダル受賞

専攻科の柴坂總七さんは、マレーシアで開催されたワールドカップ・マスターズウエイトリフティング選手権大会のM75~79、69kg級で銀メダルを獲得しました。



今年、カテゴリーが80歳からとなる為、上位を狙えるチャンスとトレーニングに励むそうです。ラウンジで祝福を受ける柴坂さん(中央)

イルミネーション点灯式

夕暮れ間際、ヒマラヤ杉と後ろに銀杏の木がシンメトリーに並んでいる立教大学の正門に佇む。静かなひと時が流れて、いよいよ華やかな点灯式が始まる。闇に浮かぶ灯りの中で、聖歌とオルガンの演奏を聴き、ソフトで美しい響きのハンドベルの余韻を残しながら点灯のカウントダウンが始まった。手持ちのキャンドルの灯りを消して3・2・1・点灯!周りの学生たちの“ウォー”という声に混じって、“きれい”という穏やかな声も聞こえてきた。ヒマラヤ杉のツリーの遙か上には星空が広がっている。伝統あるイルミネーション点灯式を、こころに留めておきたいと思う。



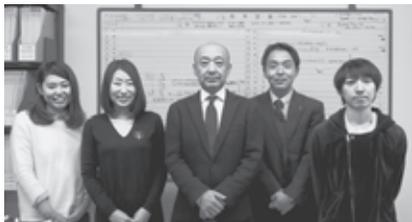
—クリスマス・クリブとは—



イエス・キリストは今から2千年ほど前に、イスラエルのベツレヘムという町の馬小屋で生まれたと伝えられています。その誕生の様子を再現した模型や人形をクリブ(crib:もとは「飼い葉おけ」と呼びます。クリブは、クリスマスの本当の意味を忘れないように作られたものです。〔聖書と私〕の授業より)

事務室のみなさん

RSSC事務室を初めて訪れた日、笑顔で入学願書の説明を頂き心が明るくなりました。履修科目の選択に際して無理がないか相談にのって頂き、安心して久しぶりの学生生活を無事始めることが出来ました。学期の初めには池袋キャンパス内で教室の所在場所が判らず、事務室に聞きお手をかけました。また、清里合宿出発の時、皆さん暖かく笑顔でお見送り頂き有難く思っております。総てのRSSCメンバーは事務室の皆様のご支援を



忘れません。

写真左より
小川 温子さん
見生 幸子さん
三邨 寛文さん
内堀 勇二さん
常田 玲央さん

講演会だより

2013年12月18日(水)に上野千鶴子客員教授による「ニッポンが変わる、女が変わる」の公開講演会が、続いて12月21日(土)に“知の巨人”として名高いジャーナリストで元立教セカンドステージ大学客員教授である立花隆氏による「立教セカンドステージ大学『自分史の書き方』の誕生」の公開講演会が立教セカンドステージ大学主催で開催されました。発行スケジュール上、記事は掲載できませんでした。



立教今昔

昔、われわれが大学生だった頃、キャンパスはある種の異空間だった。高度経済成長をひた走る東京のなかで大学だけは経済社会から断絶された別世界だった。立て看板は当然の如く体制の打倒を訴えていたし、様々な団体が集会への参加を呼び掛けていた。ひたすら真理を追究する象牙の塔であり、反戦運動の拠点でもあった。一方でゲバラ、ドラッグ、アングラなど猥雑なものも学内には蠢いていた。1969年の秋、私は立教祭の出版局長として小冊子作りと大学祭の運営に携わった。42年後、私は同じ大学でまた編集の仕事をする事になり時間と空間の落差に少しばかりとまどっている。それにしても私はこの空間の居心地が好かったので、卒業して企業社会に入る自分が信じられなかった。42年後のキャンパスは何と清潔で静かなのだろう。若者達は皆小奇麗な恰好をして、整然と勉学に励み、3年生のうちから就職活動に取り組んでいる。平和で美しい風景であり、夢のようでもある。いやあのピラやタバコの煙舞う雑然とした異空間こそが今や夢になってしまったのだろう。(編集委員記)



1969年立教祭の冊子

編集後記

セカンドステージをより豊かに、それぞれが想いを持って臨んだ入学式。その想いの実現に向けて歩んできた1年が間もなく終わります。ニューズレター12号は、RSSCでの楽しく有意義なキャンパスライフと様々なかたちでの学びの様子を記録として残す為、編集委員8人が熱心に取り組み完成にこぎつけたものです。

原稿をお引受けいただいた多くの方々、また、事務室の皆様
に心より感謝申し上げます。

(編集長・新井)

【編集委員】

後列 小林英一/鎌田康孝/上野和則/大久保茂雄
前列 大坪美津枝/柴田卓也/新井純孝/片山みや子

